

## 7 千葉県／齋藤 裕美(73歳)

あなたへ 齋藤 裕美

北風が吹き荒れる庭で、紅梅が満開です。  
見とれる私の心に春が近づいて来ます。  
北国は猛吹雪「電車が立ち往生」と、ラジオのニュースが聞えます。  
北東部「積雪の恐れあり」の天気予報。車の往来の少ないうちに、食料品を買いに。車の運転が苦手な私には大仕事。  
あなたの写真に「無事帰れますように」と手をあわせます。  
「困った人だ」と、あなたの心配した顔が浮かびます。  
夕方、いわきの友人から絵葉書が届き、  
昨日より雪、いわきの地 銀世界、  
雪の降る町を思い出だけが通り過ぎてゆく...と  
葉書きを手に、あなたと出会って五十年余りの日々。  
唯一耳にした「雪の降る町」の歌声を気がつくと、ハミングしています。  
あなたの思い出の歌だったのでしょね。  
定年まで勤め、主婦として失格だったと反省しています。  
あなたの助けで無事勤務できたと、感謝しています。  
今は、あなたの職場での友達や、教え子の皆さんから手紙をいただいています。私の知らなかった一面がわかり、あなたの優しさや強い心を再確認して、うれしくなります。  
晴耕雨読の毎日、肌もだいぶ浅黒く、手もごつごつです。  
立春をすぎるところ「ふきのとう」を見つけ、沈丁花の甘い香り、桜と咲きます。あなたの手作りの花木が一年中私を元気にしてくれます。  
いつの日か、楽しいできごとを報告したいと思います。  
ではまた...